



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 36

Feb. 2010

## 目 次

### 諸報告

2009 年度日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定.....	2
第 4 回日本植物分類学会論文賞の決定.....	3
2009 年度日本植物分類学会講演会の報告.....	4
植物分類学会講演会に参加して.....	4
講演会の感想.....	5
2009 年度第 1 回メール評議員会議事抄録.....	6

### お知らせ

日本植物分類学会第 9 回大会公開シンポジウム 「生物多様性保全における拠点機関の役割— COP10 に向けて」ご案内.....	6
2010 年度総会における審議事項.....	7
評議員会開催のお知らせ.....	12

### 寄稿

国際栽培植物命名規約第 8 版の刊行.....	12
学名のラテン語（4）.....	13

### いきもの便り

名無しのごんべい? <i>Cladophlebis</i> .....	15
-------------------------------------	----

会員消息.....	16
-----------	----

---

---

**諸報告****2009 年度日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定** 

---

学会賞選考委員会委員長 村上 哲明

学会賞、奨励賞にそれぞれ推薦のあった 8 名、11 名の候補者について学会賞選考委員会において検討しました。そして、それぞれの賞の最終候補者として 4 名、5 名を選び、ご本人から研究概要と業績リストをいただきました。それらの資料も考慮した上で協議した結果、下記のように、学会賞については 2 名の方に、そして奨励賞については 3 名の方に授賞することに決定しました。

**学会賞**

瀬戸 剛氏（元、大阪市立自然史博物館 主任学芸員）

野崎 久義氏（東京大学大学院理学系研究科 准教授）

**奨励賞**

角川（谷田辺）洋子氏（東京大学大学院理学系研究科 助教）

田中 伸幸氏（高知県立牧野植物園 研究員）

仲田 崇志氏（慶應義塾大学先端生命科学研究所 助教）

なお、授賞理由は以下の通りです。

瀬戸剛氏は、32 年間にわたって、大阪市立自然史博物館標本収蔵庫（OSA）の確立と充実に努められました。その結果、OSA はプロ・アマを問わず、近畿地方の植物相を研究するものにとって欠くことのできない標本庫に成長しました。そして、「大阪府植物誌」、「大阪府植物目録」、「レッドデータブック近畿」、「大阪府レッドデータブック」などの作成にあたって瀬戸氏は大いに貢献されました。旧日本植物分類学会は 1960 年からの、旧植物分類地理学会は少なくとも 1950 年より前からの会員であり（50 年会員）、長年にわたり学会の発展にも尽くされました。さらに、「シダ類談話会」（現、しだとこけ談話会）の運営を 50 年以上続けられ、「三重県シダの会」や「奈良シダの会」の指導も長年にわたってされるなど、アマチュアの植物研究団体に対する支援や参画も精力的に行われてきました。このようにご自身の研究のみならず、植物分類学の普及においても大いに貢献をされた瀬戸氏の業績は日本植物分類学会賞にふさわしいと評価されました。

野崎久義氏は、微細藻類と車軸藻類を材料として、分子系統学と比較形態学の手法を用いて種レベルの分類学的研究を活発に行ってこられました。そして、両方の情報を活用したこれらの植物群の記載分類に関する論文を多数発表されています。最近ではゲノム情報に基づく植物界の新しい高次分類体系の提唱、オス特異的遺伝子を基盤とする性の進化に関する独創的な研究などもされています。また、近年、絶滅が心配されている車軸藻類を保全するための研究も精力的に実施されました。さらに、日本植物分類学会の年次大会において毎年、指導学生と共に多くの発表をされてきたほか、評議員、編集委員、命名規約委員としても活躍されています。このように、野崎氏は若手が手本とするべき研究者であり、今後もその研究の大いなる発展が期待されます。

角川（谷田辺）洋子氏は、主にシダ植物を材料として種分化に関する研究を行ってこられました。シダ植物の種レベルの分類に葉緑体 DNA 上の *rbcL* 遺伝子の塩基配列を用いる先駆的な研究を開拓し、特にシマオオタニワタリ類を材料とした研究では、遺伝的分化が大きくなるにしたがって生殖的隔離が強化されることを明らかにされました。最近では、ゼンマイ類を材料として用いて、溪流沿い植物であるヤシャゼンマイが姉妹種であるゼンマイから複数の遺伝子が関わって適応的な細葉形質を獲得し、進化したことを明らかにしておられます。また、日本植物分類学会第4回大会発表賞を受賞されるなど、本学会の発展にも積極的に関わってこられました。角川氏は、自配自家受精を通じてダブル・ハプロイドの胞子体を容易に作出できることなど、シダ植物の特性をうまく利用して独創性の高い研究をされていることが評価されました。

田中伸幸氏は、半世紀以上にわたり標本採集調査が行われてこなかったインドシナ西北部のミャンマーにおいてフィールド調査を精力的に行っておられます。その調査において非常に多数の貴重な標本資料を収集され、それを基にした国内外の研究者との共同研究も活発に行い、多数の新分類群、新産種を発表されています。さらに、アジアの他の植物区系とのフロラに関連性についても比較検討を進めておられます。APG 誌や分類（和文誌）にも多くの論文を掲載され、本学会の発展にも積極的に関わってこられました。田中氏は、県立の植物園に所属して県フロラのとりまとめに活躍する一方で、このようなグローバルな研究・調査活動も活発に進められてきたことが高く評価されました。

仲田崇志氏は、多系統の分類群を多数含み、その分類が混乱していた緑藻綱オオヒゲマワリ目の種を、包括的な分子系統解析の結果に基づき分岐学的に整理されました。同時に、*Hafniomonas* 属、ヤリミドリ属、近縁藻類などについては、純粋培養株の確立、正確な種同定、分子系統解析、透過型電子顕微鏡観察などを組み合わせて、その属・種レベルの新しい分類体系を提唱されました。さらに、仲田氏は自身のホームページ（きまぐれ生物学）を通じて、関係分野の最新の論文解説や分子系統学の新しい解析手法の普及などにも大いに貢献されています。日本植物分類学会第3回大会発表賞を受賞されるなど、本学会の発展にも積極的に関わってこられました。これらの業績が高く評価されました。

## 第4回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 永益 英敏

平成21年度の論文賞は、編集委員会から推薦された論文の中から論文賞選考委員会において審査し、次の論文に決定しました。

Ebihara, A., S. Matsumoto & M. Ito. 2009. Taxonomy of the reticulate *Vandenboschia radicans* complex (Hymenophyllaceae) in Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 60(1): 26–40.

### 選考理由

日本産ハイホラゴケ群が非常に複雑な網状進化による種複合体であることは分子情報と倍数体情報をもととした著者らによる先行論文で明らかにされていた。本論文は、それらの情報により明らかになった全ての分類群について、本研究で新たに計測・解析した形態情報も加えて、この群の新たな種分類体系を提唱している。遺伝学的実態を反映し、かつ外部形態でも識別できるよう分類学的判断を行った点が高く評価できる。

## 2009 年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 篠原 渉

2009 年度日本植物分類学会講演会が 2009 年 12 月 5 日（土）に大阪学院大学で開催されました。現在の日本植物分類学会が設立されてから 9 回目の講演会となります。今回は 40 名の参加者がありました。ご講演いただいた演者とその演題は次の通りです。

佐藤 博俊（森林総合研究所関西支所）：DNA から分かるキノコの隠れた種と共生植物との相性  
海老原 淳（国立科学博物館植物研究部）：配偶体研究から見えてきた、シダ植物のもう 1 つの世界

厚井 聡（奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科）：極限環境へ適応したカワゴケソウ科の形態進化

田村 実（京都大学大学院理学研究科）：チシマゼキショウ属の系統と分類

秋山 弘之（兵庫県立人と自然の博物館）：屋久島を彩るコケ植物の多様性

菌類、シダ植物、コケのように見える被子植物、単子葉植物、コケ植物とバラエティーに富んだ発表内容で聴衆を飽きさせない話題ばかりでした。それぞれの研究分野の最先端の研究者が、これまでとは異なった切り口で精力的に研究を進めている様子がよくわかりました。興味深いお話をして下さった 5 人の演者の方々、遠方より足をお運びくださった参加者の皆様、並びに会場の提供と準備をして下さった大阪学院大学の林一彦先生に感謝致します。

## 植物分類学会講演会に参加して

山本 武能（京都大学）

12 月 5 日に開催された 2009 年度植物分類学会講演会に参加させて頂きました。私は今回が初めての参加でしたが、どの講演も初心者である私にもわかりやすく、また非常に興味深い内容でした。

佐藤先生の講演は遺伝子情報を用いた菌類の分類についてでした。単一の分類群だと考えられていたオニイグチ類の中には隠されたいくつもの種が含まれている、というお話を聞いて、もしかしたらその辺りに生えているキノコの中にもまだ知られていない種が隠されているかもしれないな、とわくわくしました。

チシマゼキショウ属に関する田村先生の講演では、改めて「植物には知られていないことがまだまだあるのだな」と感じさせられました。それほどマイナーではないように思える単子葉植物の群の中であれほど分類が混乱し、そして 1 つの分類群が異なる複数の系統

から成るということには驚かされました。

このお二人の話を聞いていて、今後分類学という学問を行っていく上で DNA 情報というのは非常に強力な武器になるのだなと感じました。分子情報から系統関係を明らかにし、その上でその系統関係とそれぞれの植物の持つ形質とを照らし合わせながら植物の進化を論じていくのは非常に面白いと思いました。

海老原先生のシダ植物の配偶体に関する講演は、シダ植物の新しい側面に触れることができ、とてもわくわくしながら聴くことができました。特に配偶体独立種についてのお話が面白く、「こんな植物もあるのか」と植物への興味を大いにかきたてられました。

厚井先生の講演では、とても被子植物には見えない風変わりな被子植物、カワゴケソウという植物を初めて知りました。中学生の時から繰り返し生物の適応や進化といったことについて教わってきましたが、このような極端な例を目前にすると、あらためて生物の力

強さに感心させられました。

秋山先生の屋久島におけるコケ植物についての講演では、何よりも秋山先生のコケ植物に対する情熱が伝わってきて感動しました。またコケ植物相の多様性の一端を垣間見ることができ、今まで何気なく見過ごしてしまうことの多かったコケ植物への興味が湧いてきました。

以上のように講演のテーマは菌類からコケ植物、シダ植物、そして被子植物と多岐にわ

たり、1日の講演会の中で様々な菌類と植物に思いを馳せることができました。今回の講演会を通して、あらためて「植物」という生き物の多様さ、そして奥の深さを実感することができました。また講演された先生方それぞれが発表の仕方にも工夫を凝らしており、その点においても学ぶところの大きい講演会でした。今回の講演会で得ることのできた植物への知的好奇心を忘れずに、これからの研究活動に取り組んでいきたいと思えます。

## 講演会の感想

野田 博士 (大阪市立大学)

私は昨年度の日本植物分類学会講演会では受付をしており、したがって昨年度は講演をほとんど聴くことができなかつたため、今回の講演会をととても楽しみにしていました。演者の方々がとてもわかりやすく解説されていたため、分類学を学び初めたばかりの私でも理解できないような部分はほとんどありませんでした。また、わかりやすい図表や美しい写真を駆使したスライドが多く、眺めるだけでも楽しくなるものばかりでした。

佐藤先生はキノコについての講演でした。私はキノコというとすぐにシイタケなどの腐生菌を思い浮かべてしまうのですが、今回の主題は菌根菌という植物と共生する菌類についての研究のお話でした。菌根菌の中でもオニグチ類という、ちょっと黒っぽくていかつい感じのキノコを研究材料とされていました。DNAを調べることで、これまで形態からは区別できずに同種とされていたオニグチ類の中に、遙かに多くの種が含まれていることが判明したとのことでした。またそれぞれの種は共生植物との相性についても異なっているとのことでした。形態種の中に多くの種が含まれていたことから、これからもまだまだキノコの種数は増えていきそうだと感じました。

海老原先生はシダ植物についてで、シダ植物は孢子体の分布と配偶体の分布が異なっている可能性があるという仮説をたて、その仮

説を検証するためにシダ植物の配偶体のフロラ調査をされていました。私はシダ植物の配偶体は顕微鏡で観察したことはあるのですが、まさかあれほど小さなもののフロラ調査が行われているとは、本当に驚きで、花の形態観察で音をあげかけていた自分が恥ずかしくなりました。

厚井先生は、維管束植物であるにもかかわらず根・茎・葉の区別が明瞭ではないカワゴケソウという、一風変わった植物のお話でした。私は今回初めて聞く植物だったので、こんな不思議な形態をしている植物があること自体に驚きました。

田村先生は、昔から多くの研究者によって分類群が変化してきた、単子葉植物のチシマゼキショウ属の系統と分類についての講演でした。古くから多くの議論を呼んできた植物だけあって、花序などの雰囲気も種間でよく似ていて、分類がとても難しそうだなと感じました。

秋山先生は屋久島のコケ植物の多様性と保全の調査報告でした。地元の方から調査を依頼されたとのことで、地元の方の“屋久島のコケ”に対する思い入れを感じました。調査の結果、屋久島には670種の蘚苔類が自生していて、それは日本全土の蘚苔類の約4割に当たっていたのですが、固有種がたった5種と少なかったことが意外に感じました。

学生の私からすれば途方もないような調査

期間から導き出された結果の報告が多く、何 た、懇親会では、講演者の方々とお話しする  
かを本質的に調べようとするには多くの時間 ことができ、最後まで本当に有意義な時間を  
を必要とするのだなと改めて思いました。ま 過ごせました。

## 2009 年度第 1 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 東 浩司

2009 年 12 月 15 日～25 日に 2009 年度第 1 回メール評議員会が開催されましたので、議  
事抄録を報告します。この会議では 2009 年度会計決算案と 2010 年度予算案、2009 年度事  
業報告案と 2010 年度事業計画案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計  
執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする、3 月 25 日の評  
議員会と 27 日の総会に提案される議案には、その後の推移を反映した最低限の修正が加えら  
れている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時：2009 年 12 月 15 日～25 日 12：00

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

### 議長選出

慣例に従い戸部博氏を議長とすることに反対はなかった。

### 審議事項

第 1 号議案 2009 年度決算案

第 2 号議案 2010 年度予算案

第 3 号議案 2009 年度事業報告案・2010 年度事業計画案

### 審議結果

第 1～3 号議案は承認 10、非承認 0、白票 3 で、承認された。

議事録署名人として高橋英樹氏と五百川裕氏が選出された。

## お知らせ

### 日本植物分類学会第 9 回大会公開シンポジウム

#### 「生物多様性保全における拠点機関の役割－ COP10 に向けて」のご案内

芹沢 俊介（愛知教育大学）

共催：名古屋市

日時：平成 22 年 3 月 28 日（日）13:30～16:30

会場：名古屋市中区伏見白川公園内 名古屋市科学館サイエンスホール（生命館地下）

対象：どなたでも参加できます。地域生物多様性の調査や保全に興味のある市民の方々、植物  
関係の大学学部に進学希望の中学・高校生、植物や環境保全について学んでいる大学生など  
歓迎。ただし会場が有料施設なので、日本植物分類学会会員以外の参加希望者は事前に名古  
屋市環境部生物多様性企画室 052-972-2696 に申し込んでください。

参加費：無料

### プログラム

13:30 趣旨説明

13:35 東海地方の豊かな生物多様性と名古屋市の取り組み 愛知学泉大学 矢部 隆

東海地方の動植物相の特徴と、それを保全するため今秋の COP10 に向けて名古屋市が現

在何をしているかを説明します。

14:05 市民の調査活動拠点としての自然史博物館—神奈川県植物誌調査会の活動から

神奈川県立生命の星・地球博物館 勝山 輝男

生物多様性保全のためには、何よりもまず、その地域の生物多様性を明らかにする必要があります。先進的な事例として、多くの市民が協力して地域フロラ研究を行っている神奈川県植物誌調査会と、それを支える神奈川県立生命の星・地球博物館を中心とした博物館グループの活動を紹介していただきます。

14:35 タンポポ調査・西日本と博物館ネットワーク 徳島県立博物館 小川 誠

代表的な市民参加型環境調査であるタンポポ調査は、1975年に大阪府で始まりました。大阪府ではその後も5年間隔で調査が続けられてきましたが、この伝統を基礎に、今春多くの博物館が連携して、タンポポに関する総合的な広域調査「タンポポ調査・西日本2010」が行われます。その全体像と意義を紹介していただきます。

—休憩（5分）—

15:10 地域生物多様性の研究と生物多様性保全 愛知教育大学 芹沢 俊介

個々の事例で見れば、名古屋圏の生物多様性研究はそれほど遅れているわけではありません。しかし全体としてみると、市民の間での広がりが少なく、情報集積も進んでいないのが現状です。情報とその裏付けとなる資料の集積がないとどう困るか。最近の名古屋圏での事例をもとに説明します。

15:25 市民が望む生物多様性センター（仮題） ため池の自然研究会 大沼 淳一

地域生物多様性の解明に向けて市民は何をするつもりか、そのために何が必要かを話していただきます。

15:40 総合討論

会場では、学会で発表される講演のうち、シンポジウムの内容に関連のあるポスターも展示されます。

## 2010年度総会における審議事項

庶務幹事 東 浩司

3月27日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

2009年度事業報告（案）（本ページ参照）

2009年度決算報告（案）（9ページ参照）

2010年度事業計画（案）（10ページ参照）

2010年度予算（案）（11ページ参照）

### 2009年度事業報告（案）

#### (1) 集会等の開催

・学術集会、講演会、研修会

年次学術集会（日本植物分類学会第8回大会）を宮城県民会館で開催した（3月12～15日）（ニュースレター No. 33で報告）。

2009年度野外研修会を高知県吾川郡の瓶が森および高岡郡日高村の錦山で開催した（5月15～17日）（ニュースレター No. 34で報告）。

2009年度講演会を大阪学院大学で開催した(12月5日)(ニュースレター No. 36で報告)。

・総会, 評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催した(3月14日)(ニュースレター No. 33で報告)。

臨時総会を日本植物学会第73回大会に合わせて開催した(9月19日)(ニュースレター No. 35で報告)。

評議員会を2回(ニュースレター No. 33, 35で報告), メール評議員会を1回(ニュースレター No. 36で報告)開催した。

(2) 出版物の刊行

・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第60巻1-2号(計2冊)を発行した(第60巻3号は2010年2月発行予定)。

和文誌『分類[日本植物分類学会誌]』第9巻1-2号(計2冊)を発行した。

・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』32-35号(計4冊)を発行した。

(3) 委員会活動

・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会

・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会

・植物データベース専門委員会

・学会賞選考委員会(ニュースレター No. 36で報告)

・大会発表賞選考委員会(3月に発足, ニュースレター No. 33で報告)

・論文賞選考委員会(ニュースレター No. 36で報告)

(4) 表彰

・日本植物分類学会賞(学会賞・奨励賞)の授与を行った(ニュースレター No. 32で報告)。

・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った(ニュースレター No. 33で報告)。

・日本植物分類学会論文賞の授与を行った(ニュースレター No. 32で報告)。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

・学会連合等への参加・連携を行った: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合。

・日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「東アジアの植物多様性と保全2009」を中国科学院(中国北京)において開催した(2009年10月22-23日: ニュースレター No.35で報告)。

・以下のシンポジウム等の開催に協力した。植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム「植物と菌の創り出した多様な共生網—地中から天空まで」(2009年9月20日, 山形大学), 自然史学会連合講演会「未来に残したい日本海域の自然史遺産」(2009年11月7-8日, 石川県立自然史博物館), 生物多様性JAPAN・植物園自然保護国際機構共催シンポジウム「植物保全戦略~生物多様性を守る~」(2009年12月5日, 中央大学)。

(6) その他

・学会刊行物のバックナンバー等を販売した。

・植物分類学関連情報(学術集会, 研究動向, 出版物, 公募)を収集し, ニュースレター, ホームページ, およびメーリングリスト等で提供した。

・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。

・植物分類学マニュアルの編集(継続)。

・会員名簿の作成について検討した。

## 2009 年度決算報告 (案) (2009. 1. 17 現在)

収入の部	単価	数	2009 年度予算	2009 年度決算	予算との差異
会費					
一般会員	5000	815	4075000	4034680	40320
学生会員	3000	80	240000	187000	53000
団体会員	8000	25	200000	200000	0
バックナンバー販売			100000	233150	△ 133150
命名規約販売				107060	
利息			20	1610	△ 1590
雑収入			50000	90578	△ 40578 注 1
小計			4665020	4854078	△ 189058
繰越金			8320407	8320407	0
合計			12985427	13174485	△ 189058
支出の部					
大会補助費			100000	100000	0
講演会補助費			30000	20000	10000
出版物印刷費					
APG (60 (1-3))	700000	3	2100000	1275750	824250 注 2
和文誌 (9 (1, 2))	550000	2	1100000	947520	152480
NL32-35	70000	4	280000	211800	68200
英文校閲費			120000	45630	74370 注 3
出版物送料					
APG 送料	110	3000	330000	160039	169961 注 2
和文誌送料	145	2000	290000	155131	134869
NL 送料	110	2000	220000	111049	108951 注 4
会議費			130000	0	130000
学会賞賞金	大賞 30,000 円 × 2, 奨励賞 10,000 円 × 3		90000	90000	0
自然史学会連合負担金			20000	20000	0
分類学会連合分担金			10000	10000	0
事務費					
消耗品費			50000	25632	24368
アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			180000	155766	24234
封筒等印刷費			300000	221445	78555
通信費 (小包手数料を含む)			200000	55940	144060
手数料・その他			25000	23500	1500 注 5
自動振替集金代行基本料			3150	3150	0
自動振替口座確認手数料	190	126	23940	22134	1806
自動振替新規手数料	105	10	1050	315	735
レンタルサーバ使用料			15000	13860	1140
予備費			200000	10000	190000 注 6
小計			5818140	3678661	1949479
次年度への繰越			7167287	9495824	△ 2328537
合計			12985427	13174485	△ 189058

注 1 : 著作権使用料 87,528 円など

注 2 : APG 60 (3) 出版遅れにより印刷費、送料の支払いは 2010 年度へ繰り越し

注 3 : 英文校閲を依頼した David Boufford 氏のみへ支払い

注 4 : NL 32 は「分類」9(1) と、NL 34 は「分類」9(2) と同時発送

注 5 : 振込手数料、インターネットバンキング手数料など

注 6 : 逝去者の遺族へ会費返納

## 特別会計 2009 年度決算 (案)

収入	2009 年度予算	2009 年度決算	予算との差異
前年度繰越金	2196011	2196011	0
利息	0	0	0
合計	2196011	2196011	0
支出			
次年度への繰越金	2196011	2196011	0
合計	2196011	2196011	0

## 2010 年度事業計画（案）

## (1) 集会等の開催

- ・学術集会，講演会，研修会  
年次学術集会（日本植物分類学会第9回大会：愛知教育大学（3月25～28日）を開催する。  
2010年度講演会を開催する。  
2010年度野外研修会を開催する。
- ・総会，評議員会  
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3月27日）。  
評議員会を開催する（3月25日）。

## (2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行  
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第60巻3号および第61巻1-3号（計4冊）  
を発行する。  
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第10巻1-2号（計2冊）を発行する。
- ・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』36-39号（計4冊）を発行する。

## (3) 委員会活動

以下の委員会を組織し，目的に沿って活動する。

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会

## (4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議，植物分類学関連学会連絡会，自然史学会連合，日本分類学会連合など。
- ・韓国および中国の植物分類学会と連携し，合同国際シンポジウムの開催に協力する。

## (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売を行う。
- ・植物分類学関連情報（学術集会，研究動向，出版物，公募）を収集し，ニュースレター，ホームページ，およびメーリングリスト等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換をする。
- ・植物分類学マニュアルの編集を継続する。

## 2010 年度予算 (案)

収入の部	単価	数	2008 年度予算	前年度予算との差異
会費				
一般会員	5000	815	4075000	0
学生会員	3000	80	240000	0
団体会員	8000	27	216000	16000
バックナンバー販売			100000	0
利息			20	0
雑収入			50000	0
小計			4681020	16000
繰越金			9495824	1175417
合計			14176844	1191417

支出の部					
大会補助費			100000	0	
講演会補助費			30000	0	
出版物印刷費					
	APG (60 (3), 61 (1-3))	700000	4	2800000	700000 注 1
	和文誌 (10 (1-2))	550000	2	1100000	0
	NL36-39	70000	4	280000	0
英文校閲費			120000	0	
出版物送料					
	APG 送料	110	4000	440000	110000 注 1
	和文誌送料	145	2000	290000	0
	NL 送料	110	2000	220000	0
会議費			130000	0	
学会賞賞金	大賞 30,000 円 × 2, 奨励賞 10,000 円 × 3		90000	0	
自然史学会連合負担金			20000	0	
分類学会連合負担金			10000	0	
事務費					
	消耗品費		50000	0	
	アルバイト賃金 (発送代行料を含む)		180000	0	
	封筒等印刷費		50000	△ 250000 注 2	
	通信費 (小包手数料を含む)		200000	0	
	手数料・その他		25000	0	
	自動振替集金代行基本料		3150	0	
	自動振替口座確認手数料	190	126	23940	0
	自動振替新規手数料	105	10	1050	0
	レンタルサーバ使用料		15000	0	
予備費			200000	0 注 3	
小計			6378140	560000	
次年度への繰越			7798704	631417	
合計			14176844	1191417	

注 1: APG 60 (3) 遅れによる増額

注 2: 事務局移転がないため 5 万円とする

注 3: 役員選挙費用を含む

## 特別会計 2010 年度予算 (案)

収入	2009 年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2196011	0
利息	0	0
合計	2196011	0

支出		
次年度への繰越金	2196011	0
合計	2196011	0

## 評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 東 浩司

日本植物分類学会第9回大会（於：愛知教育大学）の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位の出席をお願いいたします。

日時：2010年3月25日（木）16時～19時

会場：愛知教育大学・自然科学棟3F

詳細は関係各位において連絡いたしますが、今回の評議員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議される他、その他の審議が予定されております。審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

## 寄稿

### 国際栽培植物命名規約第8版の刊行

池谷 祐幸（農研機構果樹研究所）

国際栽培植物命名規約（International Code of Nomenclature for Cultivated Plants; ICNCP）の第8版が昨年出版された。

形式上の変更としては、Appendix の数が第7版（2004）の4から11に増え、うち4つは第6版（1995）のもの復活だが、"Libraries holding significant collections of nursery catalogues" と "Trade designations" が新たに追加された。

規則の本編は第7版の修正が中心であるが、大きな変更点としては、1. これまで "cultivar" と "group" だけが存在した栽培植物分類群のランクへの "grex" の追加、2. 第6、第7版では、条文であった学名の翻訳や翻字に関する規則の勧告への変更、などが挙げられる。

1. の "grex" は、形態等の形質ではなく両親種が同一等の血統を元にした栽培品種の集合で、ランだけに用いられる概念である。用語としては従来の規約でも認められてきたが、これが基本ランクとなったことで、多くの条文が修正された。ただ、ランに詳しくない筆者は、この変更がもたらす効果を全く理解していないので、できればどなたかに解説して

もらえることを望む。

2. は、栽培植物の命名の実情に合わせたものと思われる。例えば、日本語のローマ字化の規則は社会的にも合意を得ていないため、ICNCPにおいて特定の方式だけを認めても、実行力が伴っていなかった。

この2. に見られるように、今回の改正では、規則の厳格化よりも実際に栽培植物を命名する際のガイドとして利便のあるものとなっている。Appendix IX "Quick guide for new cultivar names" は、第6版で新規に追加された第7版で削除されたものの復活であるが、利用者がこれに従って行動すれば、規約に合致した命名、登録等の手続きが取られるように書かれている。

ICNCP は、第2版（1958）以降は常に国際植物分類学会（IAPT）の刊行物である Regnum Vegetabile のシリーズとして出版されているが、第7版（2004）からは、国際園芸学会（ISHS）の刊行物としても位置づけられた。第7版は国内でも多くの研究機関で所蔵している Acta Horti-culturae として出版されたので、今まで当規約に親しみのなかった園芸学者の目にも触れるようになった。しかし今回の第8版は、ISHS の刊行物としては知

名度の劣る Scripta Horticulturae で出版されたため、認知度が下がることを懸念している。

また、現在の植物分類学者は、栽培植物を主要な研究材料として扱うことはないかもしれないが、教育や社会活動などでは、栽培植物の命名に関する知識も要求されるであろうから、ぜひ本書を手にとり見てもらいたいと思う。

ICNCP は、改正を審議する主体が国際植物命名規約 (ICBN) のように組織化されておらず、委員の活動力に頼っているためか、短期間で改正されることもあれば、第 5 版 (1980) から第 6 版 (1995) のように空いた時期もある。規約を流布させ、少なくとも研究者の間では規範力をもたせるためには、規約改正手続きの公開化が必要である。しかし、その機能を担うことが期待されている国際栽培植物分類学会 (IACPT) は、2007 年の設立以降、

その後の活動は順調とは言えず、今後の組織のあり方が問題になってきている。ICBN と異なり、各国語に固有の問題も扱うため、日本のように伝統的在来品種、現代の育成品種を多く持つ国からは複数の者の意見が反映されるシステムが必要である。私は今回委員として初参加したが、経験不足もあり、十分に意見を反映させることはできなかった。現状では、国内的にも意見交換する場がないため、次回の改正へ向け、どのように検討して行くべきか悩んでいる。

なお本書は、今のところ IAPT のウェブサイトやネット書店等では見あたらず、ISHS のウェブサイト (<http://www.ishs.org/pub/scripta.htm>) からのみ購入可能のようである (ISBN 978-90-6605-662-6; 送料込みで 27 euro)。

## 学名のラテン語 (4)

永益 英敏 (京都大学)

### 目より上位の分類群の学名

前回に引き続き、上位の分類群の学名を見ていこう。第 16.1 条では「科より上位のランクの学名は複数形の名詞として扱われ、頭文字は大文字で書かれる。」と規定されている。科名では「名詞として用いられる複数形の形容詞」(第 18.1 条) とははっきりと書いてあるが、この違いは、より上位の分類群では名詞そのものの学名もあることによる。

植物界のラテン名は *Plantae* である。これは植物を意味するラテン語の *planta* (女性名詞・単数) の複数形である。ついでにいうと動物界 *Animalia* は動物を意味するラテン語の *animal* (中性名詞・単数) の複数形である。

国際植物命名規約に示されている各分類群の学名の語尾を表にまとめてみる。これをみると、目以下のランクの学名の語尾は植物全体にわたってそれぞれのランクで同じであるが、目よりも上位の分類群では菌類、藻類、その他の分類群で異なっていることがわかる。そして目以下のランクの学名の語尾ははっきりと条文中で規定されている (第 17 条, 第 18 条, 第 19 条) のに対して、目よりも上位の分類群の語尾は勧告として示されているだけである (勧告 16A)。科より上位の分類群の学名には優先権の原則は強制されない (第 11.10 条) ことにも注意しておきたい。

菌類を除く門の学名の語尾 *-phyta* は植物を意味するギリシア語系の語 (ローマ字で表記されラテン語風の活用変化をするのであるから、もはや純粋な意味でギリシア語ではないのだが、面倒なので以下単にギリシア語という) *phyton* (中性名詞・単数) の複数形である。菌類の門の語尾 *-mycota* は菌を意味するギリシア語 *myces* (男性名詞・単数, 語幹 *myc-*) に「似たもの」を意味するギリシア語の形容詞語尾 *-otus*, *-a*, *-um* がついた *-mycotus* の中性複数形である。

亜門の学名の語尾 *-phytina* は *phyton* に「似たもの」を意味するギリシア語の形容詞語尾 *-inus, -a, -um* がついた *-phytinus* の中性複数形である。

菌類の綱の学名の語尾 *-mycetes* は単純に *myces* (男性名詞 [第 62.2 条 (a)]・単数, 語幹 *mycet-*) の複数形。藻類の綱の *-phyceae* は藻を意味する *phycos* (男性名詞 [第 62.2 条 (c)]・単数) に「似たもの」を意味する形容詞語尾 *-eus, -a, -um* がついた *-phyceus* の女性複数形。その他の植物に用いられる綱の学名の語尾 *-opsida* はやっかいである。「似たもの」を意味するギリシア語の *opsis* (女性名詞, 語幹 *opsid-*) に由来するが, 形容詞語尾として扱って中性複数形 *-opsida* を導いたように見える。

亜綱の学名は「似たもの」を意味するラテン語形容詞語尾 *-idus, -a, -um* を *-mycet-* (菌類), *-phyc-* (藻類), あるいは直接 (その他の植物) につけて女性複数形 *-mycetidae, -phycidae, -idae* としたものである。

性をみると, 門と亜門の学名は中性, 綱では男性 (菌類) か女性 (藻類) または中性 (その他の植物), 亜綱以下ではすべて女性であり, いずれも複数形となっている。形容詞語尾をもつ学名ではギリシア語の *phyta* (中性) またはラテン語の *plantae* (女性) に一致させて中性か女性のいずれかであり, ごく上位の分類群を除いてはラテン語が好まれているのがわかる。

	菌類	藻類	その他の植物
門	<i>-mycota</i> (n.)	<b><i>-phyta</i></b> (n.)	<b><i>-phyta</i></b> (n.)
亜門	<i>-mycotina</i> (n.)	<i>-phytina</i> (n.)	<i>-phytina</i> (n.)
綱	<b><i>-mycetes</i></b> (m.)	<i>-phyceae</i> (f.)	<i>-opsida</i> (n.)
亜綱	<i>-mycetidae</i> (f.)	<i>-phycidae</i> (f.)	<i>-idae</i> (f.)
目	<i>-ales</i> (f.)	<i>-ales</i> (f.)	<i>-ales</i> (f.)
亜目	<i>-ineae</i> (f.)	<i>-ineae</i> (f.)	<i>-ineae</i> (f.)
科	<i>-aceae</i> (f.)	<i>-aceae</i> (f.)	<i>-aceae</i> (f.)
亜科	<i>-oideae</i> (f.)	<i>-oideae</i> (f.)	<i>-oideae</i> (f.)
連 (族)	<i>-eae</i> (f.)	<i>-eae</i> (f.)	<i>-eae</i> (f.)
亜連 (亜族)	<i>-inae</i> (f.)	<i>-inae</i> (f.)	<i>-inae</i> (f.)

m. 男性, f. 女性, n. 中性, ボールド体は名詞語尾

#### 編集後のひとこと

今号の記事にも研究での失敗談を予定しておりましたが, スペースの都合上で次号に持ち越しとさせていただきます。記事は既に到着しておりますので, どなたが登場するか楽しみにして下さい。

また, 前号および今号でも紹介した第 9 回大会の詳細が, ホームページ上でもご覧いただけます。http://www.hm3.aitai.ne.jp/~tkushida/ にアクセスしてみてください。

By 編集人

## いきもの便り

名無しのごんべい? *Cladophlebis*

山田 敏弘 (金沢大学)

今回の「いきもの便り」は、化石の話です。いろんなところから「生きてねーじゃん」的な声が聞こえてきそうですが、しばしの間、お付き合いを願っておきます。

植物化石は、比較的良く地層の中に含まれている化石の1つですが、多くの場合、葉、茎、花などの器官がばらばらになって見つかります。そのため、多くの植物化石では、ばらばらになった器官の“持ち主”が分からず、古植物の世界では「器官属」というものを使って、それらをとりあえず整理しています。今回取り上げた *Cladophlebis* もそのような器官属の1つで、胞子嚢など類縁を推定する特徴が残されていない、等二叉分岐する葉脈を持つ中生代型のシダ類の葉に対して用いられます。写真は、千葉県銚子市外川付近に露出する約1億2500万年前の地層から見つけた *C. exiliformis* です。ちなみに、日本の植物化石に関する初めての報告は、1877年のT. H. Geylerによるものですが、この種はその中で報告された化石の1つです。

ご想像の通り、等二叉分岐する葉脈を持つシダ類の種なんて、いくらでもあります。結果として、中生代の地層から見つかる化石のリストを見ると、「シダ類がほとんど *Cladophlebis* 属の種」なんてことも、しばしばです。化石の文献には、*Cladophlebis* sp. という記述も結構な頻度で登場し、「シダの葉という以上の情報がほとんどない」と、思わずつつこみを入れてしまいます。僕のような化石ファナティックには、「*Cladophlebis*」

という愛の無い器官属は、何か受け入れづらいものがあります。「名無しのごんべい」という名前を化石たちにつけて、それ以上の名前を付けることを放棄しているように思えてならないのです。

最近、僕は自らに“禁ごんべい”を課すべく、保存の良い化石探しを始めました。日本の太平洋側には、海で堆積した白亜紀前期(約1億4500万年前~9950万年前)の地層が断続的に露出していて、よく探すと、組織がきれいに保存された植物片がたくさん見つかります。その中には、シダ類の葉柄やソーラスが付いた小羽片のかけらが入って、これまでに報告された *Cladophlebis* 属の葉の破片も一部ありそうです。いつか、ごんべいの無い世界を実現できればと願っています。



図. *Cladophlebis exiliformis* (Geyler) Oishi. スケールバーは1 cm。

あなたも楽しく記事を紹介してみませんか？

ニュースレターへの情報提供、寄稿大歓迎です。ご連絡は下記まで。

東 隆行 〒060-0003 札幌市中央区北3条西8 北海道大学植物園

TEL: 011-221-0066 FAX: 011-221-0664 e-mail: azuma@fsc.hokudai.ac.jp